第1部

音大卒を武器にする

Chapter 1

音大生の力

音大生の能力

まず結論から言いましょう。社会で生きる上で、音大卒は武器になります。

こう言うと驚かれる方もいらっしゃるかもしれませんね。就職課に相談に来る学生の中には、「私はピアノしかできないのですが、それでも就職できますか?」といった感じで質問する人も多くいます。

たしかにピアノしかできないと思っている人には、「武器になる」と言われてもピンと来ないかもしれません。しかし、本人は「ピアノしかできない」と思っていても、多くの学生が

気付いていないだけで、じつはとてもたくさんの、すばらしい能力やスキルを持っているのです。

２０１２年に、『ピアニストの脳を科学する 超絶技巧のメカニズム』（春秋社）という本が出ました。それによると小さい頃からピアノを弾いている人の脳は、普通の人よりも活性化されていると科学的に証明されたそうです。同様に、小さい頃からヴァイオリンを弾くことも、脳によい影響があると言われています。たとえば、スズキ・メソードのように子どもに見本となる音楽を聴かせ、それをそっくりそのまま再現できるようになるまで何度も演奏を繰り返させる教育プログラムなどもあります。このような訓練によって脳の皮質の発達を促すようです。

つまり、音楽を小さい頃から始めている人の脳は、普通の人より発達している可能性が高いということです。音楽を小さい頃から始めている人には、何をするにも、何を考えるにも、もっとも大切な脳が普通の人より発達している、というアドバンテージがあるはずなのです。

そういえば、私にも思い当たることがあります。私が通っていた都立国立高校時代の同級

生に久和（くわ）ひとみさんという方がいらっしゃいました。高校の合唱部で一緒に活動した仲ですが、それはそれはすばらしいソプラノでした。美貌で、頭もよく、早稲田大学の政治経済学部を卒業し、テレビ朝日系の「CNNデイウォッチ」というニュース番組のキャスターを長く務めた方です。彼女は小さい頃からヴァイオリンをやっており、音大に進めばおそらくヴァイオリニストにもソプラノ声楽家にもなれたのではないかと思うほど、すばらしい音楽性の持ち主でした。

ところが、時々こんな美人が、と思うような突飛な行動や発想をすることがありました。そもそもの発想が、普通の人とまったく違うのです。本人にも自覚があり、「私は小さい頃からヴァイオリンをやっていたから普通の人と脳波が違うみたい」と話していました。そのときは、小さい頃からのヴァイオリンが脳にいいなどとは思い至らなかったので、冗談と思い聞き流していました。しかし、最近この本を書くためにいろいろ調べている中で、ようやく当時の彼女が冗談ではなく、本気でヴァイオリンが脳に影響していると考えていたことを理解するようになりました。あの感性、ひらめきは、小さい頃からのヴァイオリンで脳が普通の人とは比べものにならないほど発達していたからなのだと、納得がいきました。

残念ながら久和さんは、若くして病気で亡くなられました。ほろ苦いことがあまりに多かった私の青春の中で、彼女とのさまざまな会話は大切な宝物となっています。

さて、今ご紹介したのは、近年いろいろなところで言われている、音楽をやっていることで身に付く能力です。そして、それ以外にもみなさんは音楽を学ぶことを通じて、さまざまな能力を身に付けています。

たとえば、コミュニケーションの能力。

一般の大学では、多くの場合、一教室に300〜400人収容されるような教室で授業を受けています。少人数の科目は限られていたり、少人数といっても10人以上だったりということが多いでしょう。

それに対して音楽大学の授業は、先生とのマンツーマンのレッスンが当たり前のようにあり、嫌でも先生と会話せずにはいられません。おのずと年上との接し方を学びます。

もちろん、入学当初から全員がきちんとした会話ができるわけではありません。しかし、日々のレッスンの中で、意識しないうちにコミュニケーション力が鍛えられていきます。そ

して、自分より30も40も歳上の人にも物おじせず話すことができるようになるのです。音大生は当たり前のことのように思っているかもしれませんが、これはじつはすごい能力です。

多くの会社には課長というポストがあります。課長とはいわゆる「中間管理職」です。ソコソコの地位にはついて部下はいるけど、支店長や部長など上司からも管理される立場。上と下に挟まれサンドイッチになってストレスが溜まることの多い立場といえます。そして課長にアンケートを取ってみると、ストレスを感じるもっとも大きな悩みが「部下とのコミュニケーション」なのです。

一般大学の学生は、学生同士で群れることが多く、年上と接する機会は多くありません。せいぜいアルバイトでの接客で年上のお客さんと接したり、アルバイト先の上司と接したりするくらいです。これでは、本当のコミュニケーション能力は養われません。言われた通りにやる、決められたことをやっているに過ぎないからです。

音大生の場合は違います。

レッスンで先生と曲の解釈の違いで激論したり、進路に悩んで先生とじっくりふたりで話したりといった、双方向でのコミュニケーションが繰り返し行われます。私から見ると、こ

れだけでも音大生の力は段違いに培われているといえます。

それから、当たり前だけどなかなかできない能力。

武蔵野音楽大学では「和」という建学の精神のもと、「礼儀」「清潔」「時間厳守」という3つの生活の指針が示されています。そして日々の生活やレッスンのなかで叩き込まれます。じつは、これがきちんと守れる人は、社会人でも多くありません。

私自身、若い頃は挨拶で怒られ、身だしなみで怒られ、お客さんのところに遅れていき、迷惑をかけたものです。

しかし、音楽大学ではこの指導が徹底されています。

武蔵野音楽大学で私が目にした光景です。あるとき、学生がたった1分ほど遅れてガイダンスの教室に入ろうとしましたが、担当の職員が入れずに返したことがありました。一見厳しいようですが、これはひとりの1分の遅れは、たとえばレッスンで次の人、その次の人に迷惑がかかるということをしっかり教える必要があるからです。また、公立学校の教員採用試験では遅刻はいっさい許されないので、その訓練も兼ねているようです。

私ははじめ、武蔵野音楽大学に来たときに「時間厳守」を標榜するのに正直驚きました。もっと音楽の技術力向上に直結する、たとえば「切磋琢磨」といったようなものの方がしっくりくると感じたからです。しかし、先にご紹介したレッスンを円滑に行ったり、試験に遅れないようにしたりという理由のほかに、本番の演奏会に向けたプロセス管理にも時間厳守が必要だということを知り、合点が行きました。本番の演奏会の翌日に、パッセージを弾けるようになっても意味がありません。本番当日に間に合うかが勝負なわけです。

一般社会でも、時間管理は非常に重要です。

会社には決算日というのがあります。それが3月31日だとすれば、1日でも過ぎたらまったく意味をなさないことがあります。また、手形の支払期日を1日でも過ぎると不渡り手形を出したことになり、会社は倒産してしまうこともあるのです。

このように音楽大学の教育現場では、みなさんや教員の方すら気付いていないかもしれませんが、実社会で必要なさまざまなことが教え込まれています。

もうひとつ例に挙げてみましょう。武蔵野音楽大学の就職課の入口には、次のように書か

れています。

「就職課に入室する学生へ　事務室に入室する際は、コートは脱ぎ、マフラー・帽子・サングラス等は、外してから入室してください。一般常識として励行しましょう」

学生は、就職課に入室する際は、冬でも外で上着やマフラーを脱いでからノックして入室します。挨拶も非常にしっかりしていて、この大学に来たばかりの頃は本当に感心しました。みな「おはようございます」「こんにちは」としっかり声を出します。

私のいた銀行では通常、上司には「お疲れさまです」が普通でした。しかし、学校では学生だけでなく職員も、学長や目上の先生方に親しみを込めて「こんにちは」と挨拶します。言ってみると、「こんにちは」という挨拶は、かなり気持ちがいいものです。

このように「礼儀」「清潔」「時間厳守」がきちんと実践されているのは、音楽大学ならではです。もちろん武蔵野音楽大学に限らず、多くの音楽大学で歳上の先生とのレッスンを

武蔵野音楽大学就職課の入り口

円滑に行うためのさまざまな知恵が生活指針となり、実践されていると思います。ほかにも音大生ならではの並外れた努力や粘り強さなど、挙げればいくつも出てきます。このあたりは、30ページでもご紹介しましょう。

音大生は一般には演奏家や教員を目指す場合が多いと思います。もちろんそれもよいのですが、それ以外の社会でも通用する力が備わっているのだということにぜひ気付いてほしいのです。音大生が活躍する場は、演奏や教えるだけではなく、もっともっとたくさんあるということをこの機会にぜひ知っていただきたいと思います。

音大生の夢と現実

前節でお伝えしたように、音大生にはさまざまな、大きな可能性があります。

まず、みなさんが抱く大きな夢は、小澤征爾（おざわせいじ）さんや中村紘子（なかむらひろこ）さんといった、世界で活躍するような演奏家でしょうか？　あるいは小さい頃に習ったピアノの先生や、小学校や中学校、高校で大きな影響を受けた先生のようになりたい、という方もいらっしゃるかもしれませんね。

どれを目指してもよいと思います。ぜひ、夢を持って道を思い定めてください。とくにこれから音楽大学を目指そうと思っている高校生以下のみなさんには、プロの演奏家や音楽教員の道が大きく広がっています。もちろん、音楽家への道には「才能」という大きな壁があるわけですが、この壁は、チャレンジしてみない限り決して姿を現すことはありません。音楽大学に入って、少なくとも1～3年生の間は全力で音楽に取り組み、この壁にチャレンジしてみましょう。ぜひ音楽で生計を立てることを夢見て、それを実現させる目途を付けていただきたいと思います。

そして3年生の終わりか4年生のはじめに、頑張った成果がきちんと表れているか、音楽で身を立てられそうなレベルに達することができたか、確認してみましょう。これならいける、という人はぜひ音楽の世界で頑張ってください。

そして、残念ながら頑張っても思った成果が上がらず、「才能の壁」が大きく立ち塞がっていると感じた場合も、決して悲観することはありません。本書がテーマとしているように、演奏家や音楽教員以外にも音大生の生きる道は数多くあります。安心して音楽に打ち込んでください。大学生活の前半くらいが終了した段階で、進もうとしている道の実現可能性を考

えて難しいと感じたり「才能の壁」が高いと感じたりした方は、ほかの道も考えられる柔軟性を持つこと、そして現実の世の中を知ろうとすることが大切です。

夢を持て、と言っておきながら少し心苦しいのですが、少し現実の話もさせてください。夢を持ってチャレンジするにも、その世界の現実を知らないとあとで後悔してしまいます。

まず演奏家への道ですが、これはとても狭いです。プレイヤーへの道が狭いのは何も音楽に限りません。たとえば男子プロゴルファーというのは約６０００人いるそうですが、プロとして生きていけるのはほんのひと握り。トッププロは億単位の賞金を稼ぎますが、１００位になると賞金は年に５００万円くらいです。残りの５０００人以上のプロゴルファーの多くが、賞金だけでは生活が成り立ちません。

プロ野球選手も、年俸〇億と高額で話題になりますが、それはきわめて限られた人の話です。春や夏に高校野球の大会がありますが、出場校が約50あるとしてレギュラーは４５０名、プロに入れるのはほんの数名。その中で1軍に定着するのはひとりかふたりでしょう。また毎年11月にはドラフト会議で有望な新人が話題になりますが、その陰で多くの現役選手

が戦力外通告を受け球界を去ります。２０１４年度も１２０名が去るそうです。これまで野球だけで生きてきただけに、これらの選手の多くにはこれから先、厳しい現実がのしかかります。

このように音楽以外の世界を見渡しても、プレイヤーとして生きていくということがいかに難しいかがわかると思います。しかし、可能性を信じチャレンジした者でなければ、決してプロ野球のイチロー選手やフィギュアスケートの羽生結弦（はにゅうゆづる）選手のようなヒーローになることができないのも事実です。

教員になりたいと考えている人も多くいますが、これもかなり難関です。さらに大学の教員などは、プレイヤーとしての実績も考慮されます。そう考えると、プレイヤーや教員として生きていくのは並大抵のことではないことが実感できるでしょう。毎年学年でトップをキープしているとか、ある程度名のあるコンクールで優勝したといった、よほど腕に自信がある人を除いては、演奏家一本ではなく、別の道も考えられる柔軟性を持ってほしいところです。

音楽に限らず、何をやるにせよ、おカネがないと何もできません。それが世の中の現実です。

いくら音楽が好きでも、演奏家として生きていくにはよほどの実力がないとなれない。それなのに暮らしていくにはおカネが必要――そういう現実を冷徹に見つめることはとても大切なことです。

しかし先にも述べましたが、演奏家にならなくても、音楽をやってきたことは決して無駄にはなりません。みなさんは音楽を通じて、社会人として生きるために必要なスキルを身に付けています。そこに気付くことができれば、さまざまな可能性が待っているのです。

❀自分の立ち位置を知っておこう

誤解していただきたくないのですが、私がこれまでお伝えしたことは、音大生のみなさんに演奏家や大学の教員をあきらめなさい、と言っているわけでは決してありません。私も音大の職員として、ひとりでも多くの卒業生が音楽の世界で活躍することを願っています。し

かし、大学4年生にもなれば、自分の演奏能力にある程度の自己評価ができると思います。また、学内の選抜オーディションなどを通じて、客観的な評価も何度か受けていることでしょう。

私がここでご提案したいのは、その現実をきちんと受け止め、自分の立ち位置を知っておこう！　ということです。そして自分の立ち位置を知った上で、人生という長いマラソンを勝ち抜くための戦略を練る。その戦略の中には、必ずしも音楽を仕事にするということにこだわらないという選択もあるということです。

音大生には、「ここまで音楽をやってきたのだから音楽以外の仕事なんて考えられない」という人が多く見受けられます。音楽を専門に学びたいと音大の門を叩いたのですから、そのように思う気持ちも理解できます。

しかし、ほかの学部の様子はどうでしょう。たとえば法学部の学生の多くは、法律を仕事とするための司法試験を受けずに一般の会社に就職します。法学部を出た学生にとっても司法試験は超難関で、ほとんどの学生は挑戦さえしません。それでも彼らにはほとんど挫折感

は見受けられませんが、音大の学生は音楽以外の道に進むと「音楽に挫折した」とか「楽器を捨てた」とか、そういって自虐的になることもあります。また、別の道を目指し始めた仲間を、場合によっては責めることすらあるという声も聞きます。

もちろん、それだけ専門に没頭しているからこそ、ということもあるでしょう。しかし、音大生が培ってきた能力が発揮される場は、何も演奏や教育だけではありません。また、音楽に関する仕事だからといって、学んできた専門性が発揮できるとも限らないのです。

たとえば、サクソフォンを専攻した学生が楽器店に入ったとします。楽器店では、学んできたサクソフォンだけを売ればいいわけではありませんね。フルートもクラリネットも、弦楽器や打楽器だって売らなければなりません。10種類の楽器を扱っているお店なら、サクソフォンの専門能力は10分の1しか活用できないのです。

さらに、楽器店では楽器を売る以外の数多くの仕事があります。そうなると楽器店では音大生が必ずしも優位に立てるとは限りません。実際、自動車ディーラー（販売会社の販売員）から転職してきた、音楽を知らなくてもお客さんの気持ちをよく知っている人のほうが結果を出すこともあるのです。

音楽を専門にやってきたつもりでも、多くの音大生は社会にある広い音楽領域からすれば、ごくごく狭い範囲の勉強をしているに過ぎません。むしろ、この元ディーラーの人のように、音楽そのものよりも、何かを学ぶことによって得られた「スキル」が仕事に活かせるのです。

ちなみに、好きなことを仕事にするとそれが楽しくなくなる、という可能性もあるようです。2013年にプロ野球を引退したヤクルトの宮本慎也（みやもとしんや）選手が引退会見でこんなことを言っていました。

「プロに入って野球が仕事になった。それからは、私はいちどたりとも野球を楽しんだことはない」

同じことは音楽にも言えるかもしれません。

自分の立ち位置を確認し、音楽だけで生計を立てることが難しいと感じる方には、ぜひ音楽は楽しむためのものとして大切にし、音楽を学ぶことで育まれたスキル・能力を活かした職業につく、という道も考えていただければと思います。

❀音大生だけが持つ能力

音大生だけが持つ能力とはどのようなものでしょうか？

一般大学生にはなく、すべての音大生がかなりの高いレベルで身に付けている能力。そんなものはあるわけない、と思うかもしれませんね。しかし、あるのです。私はあえて断言します。

それは、「いくら叱られてもめげない精神力」です。

最近「聞く力」とか「〇〇の力」という言葉が流行っていますが、いわば「叱られる力」あるいは「めげない力」でしょうか。音大生ならおそらく誰でも、練習が不十分で30分間のレッスン中ずっと怒られっぱなしだった、といった経験をお持ちではないでしょうか？　それのどこが力なんだ、と思うかもしれません。しかし、私のように銀行員を30年もやってきた人間からすると、これは社会人ならぜひ持っていてもらいたい力です。

とくに最近は親にも怒られた経験がないという学生もいて、そのような人は、少し強く叱

られただけでめげてしまいます。また上司がよかれと思って行った指導がすぐパワハラなどと呼ばれてしまうこともあります。もちろん暴力などは論外ですが、上司の厳しい指導は時に成長の起爆剤となることもあるのです。

多少のストレスにくじけることなく、指導を前向きに捉えられる人間ほど頼もしい者はありません。音大生は、そういった意味で、大きく成長する素地が大きいのです。

就職課に来る音大生からも、練習不足で先生にどれほどこってり絞られたか聞くことがあります。練習不足に先生の不機嫌が重なったときなどは最悪ですね。それでも音大生は反省し、努力し、挑戦し、したたかに生き延びています。この「叱られる力」は、まぎれもなく音大生だけが持つ能力といっていいでしょう。

❀ 音大生であることの利点

演奏の能力以外に、音大生が持つ一般の大学生にない能力はたくさんありますが、実際に音楽業界以外で働こうとすると、相手からはどう思われるでしょうか。

私自身、学生から「音大生ということで、不利なのでは?」という悩みをよく聞きます。しかしじつは音大生であることは、有利な面もあるのです。ここでは、私が勤めてきたような一般の企業を想定し、音大生がどのように評価されるかなどを考えてみたいと思います。

実際のところ、音大生を積極的に採用している企業でも、現場レベルでは色眼鏡で見られることがあります。ひどいところでは、「なんだ、お嬢さん（お坊ちゃん）が来るのか」という印象を持たれてしまうこともあるのです。

そうです。音楽大学は厳しい競争にさらされる大学なのですが、音大の実態を知らない世間一般では「お嬢さん大学」であるというイメージがいまだに根強いのが現実。そこで、そのイメージを逆に利用してしまうのです。

どうせしばらくは使えないだろう、くらいにしか思っていなかったのに他大学出身者よりずっと優秀だとわかったらどうですか? 最初のイメージとのギャップが大きいほど評価はうなぎ登りです。

企業では、たとえば同じくらいの成績のふたりの新入社員がいたとすると、期待されてい

た新人と無理だろうと思われていた新人では、後者の評価の方が高くなります。これは、前者は前評価を裏切る働きしかできず、後者は期待以上の働きをするためです（このように心理的影響で評価が異なってしまうことを「ハロー効果」といいます）。

また、いわゆる有名大学出身の新入社員がその業界の専門用語を知らないと、「なんだ、そんな言葉も知らないのか」となります。もし音大卒の学生も専門知識がなかったとしても、音大生特有の根性と暗譜で鍛えた記憶力を発揮して、1年くらいの間に知識を吸収すれば、「1年の間にすごく成長したね！」と成長度の高さが前向きに評価されることでしょう。

ちなみに、会社によっては社内に吹奏楽団や合唱団、オーケストラなどがあります。そういう会社に入り、吹奏楽などのサークルに入れば、そのサークルではあなたはヒーローです。隣の部の部長にフルートを教えてあげたり、支店の課長に楽譜の読み方を教えたり、ということが起こります。

ほかの部署の人と接する機会が多くなれば、自然と社内の情報が入ってくるようになります。すると、いざというときにいろいろと協力してもらいやすくなりますね。いわゆる社内

人脈です。これが広いということは、仕事を進める上でとても有利です。

平社員が釣りを通じて社長と親しくなる、なんてマンガや映画もありますね。あれは娯楽用にかなりデフォルメされていますが、○○部（課）、○○支店などの正式な組織（「フォーマル組織」といいます）よりも、サークル活動などの自発的に組織化された組織（「インフォーマル組織」といいます）の方が社内を活性化させ生産能力を高める、という考え方は経営学の世界では広く知られています。ですから社内の好きな者同士の集まりといっても、じつは馬鹿にできないのです(注)。

このようなことから考えても、音大生が一般の会社に就職する場合、不利になることはまずありません。むしろ音大生であることの強みをうまく活かすことができれば、より有利になり得るのです。

実際、音楽大学を出て一般の企業で活躍している方は意外と多くいらっしゃいます。その代表例は元ソニー社長の大賀典雄（おおがのりお）さんでしょう。2011年に亡くなられましたが、東京藝術大学出身の財界人として有名です。また、武蔵野音楽大学の卒業生の中には、ゲーム機・

ゲームソフト大手関連企業の社長や、空調設備会社の本部長を務められた方などもいらっしゃいます。

先日ある大手生命保険会社の採用担当の方とお話ししましたが、入社10年前後の多くの音大卒の女性社員がすばらしい戦力になっているということもお聞きしました。ちょうど結婚、出産時期を迎え育児休業を取っている方もいらっしゃるそうですが、現場の仲間たちからは1日も早く復帰してほしいというくらい頼りにされているようです。また誰もが知っている有名な調味料会社で役員の秘書として活躍されている方もいらっしゃいます。

このように、じつは音大生は多くの会社で非常に活躍しています。音大生の絶対数が他大学に比較して少ないので目立ちにくいかもしれませんが、音楽以外の分野で活躍している人は意外と多く、その比率では、一般大学に決して引けを取らないと思います。

注――
1924年から1932年までに行われたメイヨー、レスリスバーガーの「ホーソン実験」が有名です。社内の仲間で飲みに行く、いわゆる「飲みニュケーション」などもインフォーマル組織といっていいでしょう。